The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂と和學
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	懐徳. 1957, 28, p. 65-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90314
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

回想録

故きを溫ねて新しきを知らば以て師たるべし

懷德堂と和學

小島吉雄

一體、わたくしたちが和學という言葉を用いますのには、特別の理由があるのでありまして、國學と區別するためであります。國學と申しますのは、日本古典學でありますけれども、荷田春滿から眞淵、宣長と發展してゆきました國學には、わが國固有の國民精神の本源を究明して古道または神ながらの道を明かにし、これを宣揚しようとする明確な主義精神というものがありまして、佛敎とか儒敎とかの外來思想を排斥し、かたくなに一つの世界觀にとぢこもろうとするところがあります。近世の日本におきましての、この國學の流れが大きくて、日本學卽ち國學という風に考えられがちなのでありますが、しかし、近世の日本古典學には、この國學の外に、そのような主義精神にとらわれない、また排他的でない、儒敎をも佛敎をも必要とあらば進んでこれを利用する、いはば純客觀的に學問的に日本古典の研究を推進していつた學者の一派もあつたのであります。わが大阪の生みました契沖阿闍梨などは、この方の大家でありますが、この契沖のような學風を所謂國學から區別するために、わたくしは和學といふ言葉がふさわしいと思うのであります。これから話しまする懷德堂の諸碩學の日本古典學もやはりこの契沖のような性格のものでありまして、國學のような偏向したイデオロギーをもつていない、ですから、これもわたくしの所謂和學の方なのであります。そこで、ここに、懷德堂と和學と申しあげるわけであります。

ところで、懷德堂はいうまでもなく漢學塾であります。從つて、その本筋とするところは、漢學の敎授でありますが、懷德堂の創設者、三宅萬年先生がまず和學に興味をもつておられた。口の惡い上田秋成は、萬年先生のことをも

と京都の俳諧師だつたといつている。俳諧を飯の種にはしておられたわけではないでしようけれども、相當その方のたしなみのあつたことは事實で、懷德堂を開かれたのちにも俳句は手すさびに作つておられたらしいです。いま、懷德堂文庫に殘つている萬年先生遺墨帖には、俳句のみならず、和歌も殘つています。こういうわけで、萬年先生は國文の素養があり、國文學にも興味をもつておられたのでありますが、まとまつた著述が今日殘つていない。二代目の學主であつた中井甃庵先生もまた國文の素養がありました。ご存じの「とはずがたり」という著書などを見ますと、よい國文を書いておられます。和歌なども作られたようです。一體、この時代の漢學者は、みな幾らかずつ國文の素養がありましたので、その點は德川後期の漢學者と違つています。新井白石のように、日本學の方でも相當の業績を殘している人は別としましても、太宰春臺、室鳩巣そのほか、なかなか正しいよい國文を書く人が多かつたのであります。從つて、萬年先生や甃庵先生程度の國文的敎養は、特に、とりたてて申すほどのことでもなかつたかも知れません。けれども、この二先生の敎養が懷德堂に國文的趣味或は和學趣味をもたらされたということはいえると思います。

さて、懷德堂に學問としての和學を持ち込んだのは、五井蘭洲先生であります。蘭洲先生の和學は、父の持軒先生と契沖とから來てをります。それから三輪執齋の感化もあるかと思います。五井家には蘭洲の曾祖父守香が、德川初世の人ですが、和漢の學に長じていた。節用集を著し、日本紀の學を傳えたという。持軒はこの祖父の手もとで大きくなり、その學問を傳えたのです。持軒は朱子學だそうですが、その和學も本格的なものだつたようです。しかし、享保九年の大火で、持軒の著書や家傳の書は全部燒亡したと言われます。持軒はまた貝原益軒と下河邊長流と親しかつた。益軒とは京都遊學中の同門であり、長流とは同じ大和の出身というので親しかつたらしく、長流から萬葉集や古今集について敎を受け、和歌を見てもらつたりもしていました。蘭洲茗話には、持軒には家傳の說があり、それをきいて益軒は釋名を作り、また長流は契沖に語り、契沖は、それを代匠記につくつたと出ています。

蘭洲先生は三十才にして東上、三輪執齋に賴つています。執齋は陽明學者で同時に和學に造詣あり、また和歌に秀でており、持軒の友人でもありました。大阪平野の含翠堂には京都の河瀨菅雄とこの三輪執齋とが共に講師として協力しており、また懷德堂學問所の公許のためにも蔭の人として盡したのでありますが、蘭洲はこの執齋のもとにある間にいろいろ和歌についても、その說をきいたことは蘭洲茗話にも載つているところであります。

蘭洲は非常に博學で神道や佛學にもくわしく、弓術等にも深い造詣があつたらしい。和歌にもたしなみあり、新題百首というのが殘つています。懷德堂々規を見ますと、道義書以外の雜書は講じない定めであるから、蘭洲ももちろん懷德堂では日本の書物を講義するという事はなかつたろうと思います。蘭洲の和學はその業餘のものです。蘭洲の和學の著としては、萬葉詁、源語詁、源語提要、古今通、勢語通の五部書のほか、刪正日本書紀、蘭洲茗話、詠歌大概古今序紀聞、伊勢物語抄等があります。これらの著書を見てみると、契沖の著書に啓發せられているところが非常に多い。學問的にいうと、契沖の影響を受けているのですが、契沖を鵜呑みにしているのではない。元來、懷德堂と契沖との間には前から關係がないことはないのであつて、ご存じのように、圓珠庵境内の契沖の墓碑銘は蘭洲の撰でありますが。その蘭洲の墓が上本町筋の實相寺にある。中井家の墓のある誓願寺の筋向いですが、實相寺は住友家の菩提寺でありまして、ここに蘭洲の弟子の入江友俊の墓もありますが、友俊は契沖とも關係がありまして此の人の斡旋で蘭洲先生が契沖の碑文を書いたのであります。また海北若沖（契沖門人）や並河誠所とともに地誌の仕事にも携わつています。それから、さきほど申したように、契沖の友であり、また師でもあつた下河邊長流と五井持軒とが親しかつた。五井父子は大阪の和學でも重要視すべき人物であり、そして、それが懷德堂和學の中心であつた。その蘭洲と契沖とには學問的に言つて深いつながりがあるのであります。

蘭洲のことを、上田秋成の膽大小心錄には

五井先生といふがよい儒者であつた。今の竹山履軒は、このしたて禿じや。契沖をしんじて國學をもやられた。

續落久保物語といふものをかかれて味噌つけられし事よ

とあります。惡口屋の秋成がこういつているのでありますから、蘭洲先生はよほどの人物だつたろうと思います。そして、秋成も蘭洲の契沖信者なることをここで述べています。なお、これによると、先生には「續おちくぼ物語」といふ擬古物語があつたようです。わたくしはまだ見ておりませんが、その名からすると、おちくぼ物語の續きのようなものではなかつたかと思います。蘭洲先生には一女がありました。古今通や勢語通を見ると、明らかにこの女の教養のために筆を執つたとあります。源語提要などというのも、その內容から見ますと、やはり女のために書き與えたもののようです。いずれも先生五十才以後の著述でありますが、これらの著書は弟子の間で寫し傳えられました。いくつもの寫本があります。そのうち、源語詁は安永十年に源語梯として盜刻開板せられました。

次に、この蘭洲先生の門下中、和學に達したのが、加藤景範號竹里であります。景範通稱小川屋喜太郎、友輔とも號して藥種屋であります。父は儒醫で信成といいます。享保五年五月朔の生れですが、その名付親が三輪執齋です。三宅春樓が懷德堂學主の時代、寶曆八年八月の懷德堂規約附紀の連署中に小川屋喜太郎の名が見えます。また竹里の父信成自筆の蓮沼和歌集には中井甃庵が序文を竹里が跋文を書いています。竹里二十九才の時のことです。この竹里の著書は非常に多いのですが、中でも國雅管親、和歌用字みなれさほ、和歌實踐集、和歌虛詞考等は出板せられ、新古今舊注補遺、古今通補、源語解、勢語通注、萬葉趨避等はみな寫本で傳わり、古今通補以下は蘭洲の著書の補注であります。出板せられているものは、いずれも歌語辭典のようなものでありますが、最も代表的な研究的著述ともいうべき新古今舊注補遺を例にとつて申せば、これは、儒學的思想の影響を受け、儒學的見地から北村季吟の八代集抄の說を批判した注釋書でありますが、これを見ると、蘭洲の考え方を最も多く傳えており、古典考察の角度が全く蘭洲と一致しています。森繁夫氏の人物百談という書にはこの竹里の事をかなりくはしく紹介しておりますが、大阪の歌人學者として非常に大きな勢力をもつていたらしく、入門者は延べ一千數百人に上つていたということです。また、

有賀長伯の子の長因が大阪に移住しまするについては竹里が相當盡力したもののようであります。懷德堂所藏の「竹里書簡集」は長因の養子の長收との贈答の手紙が殆どなのですが、そのうちには、日附はよく分りませんが、歌についての意見なども述べられていて、なかなかおもしろいものです。わたくしは暇があつたら一度よく根本的に調査してみたいと思つていますが、一寸見てみただけでも長收を啓導している樣子が分ります。長收の女が竹里の曾孫禮文に嫁しており、有賀家とはのちに姻戚關係を生ずるのであります。

蘭洲の敎を受けた竹山、履軒兩先生にも和學の趣味が傳わりました。もつとも竹山には和文は多く殘つているが、和學の著としては萬葉假音に關するものがあるだけである。他にもあるかも知れぬが、わたくしは知りません。竹里は竹山とは友だちつきあいだつたらしく、和歌や歌學は竹山は竹里から學んでいたようです。竹里の竹山宛の手紙にそのことの分るのがあります。

履軒先生は、兄よりも日本古典に熱心だつたようです。百人一首の注である百首贅々というのがあります。賀茂眞淵の說を批判したもので、反駁が主であり、全く自分の考えだけを述べたもので、古注を參照するということもあまりやつていない。古典に關する基礎的常識の不足している點が見え、漢學者の素人考えというべき說が隨處に見えます。ただ、多年の漢文讀習による讀解力を應用して萬葉歌を解釋しているところ、その說の當否はさておき、その鋭い感受力には目をみはらざるを得ません。その說にもその文にも、その人がらが濃く出ているのがその特色です。履軒先生には、このほか雕題伊勢物語二卷、雕題古今和歌集二卷があるそうであります。多分同じようなものだと思います。和文の物語も書いていられますが、蘭洲先生とは凡そかけ違つた學風であります。

さて、前にも一寸申し述べました如く、上田秋成の膽大小心錄の記事によりますると、秋成も大阪在住中に何回か懷德堂に出入りしたもののようですが、結局この偏屈者には懷德堂は無緣のもので、懷德堂の和學とも深い交涉はなかつたようであります。

蘭洲の弟子に尼崎町の町年寄をしていた川井立牧というのがあります。この人のことはまだよく調べておりませんが、日本紀瑣言、古史和歌通というような著書がある由です。

要するに、懷德堂和學には蘭洲をはじめ、竹里にしろ、履軒にしろ、共通する特色は、漢儒の眼でわが古典を見ようとしていることであります。蘭洲が伊勢物語の中に業平の誠實の心をあとづけようとしたが如き、また源氏物語を諷誡の書と見たが如き、竹里が新古今集の注釋の中で排佛的言辭を弄しているが如き、いずれもそれを物語るものであります。また、學風が文獻學的傾向が多く、實證的であり、忠實な本文解釋に立論の根據をおこうとすることもその共通することの特色であります。このことは懷德堂漢學の特色とどういう關係にあるのかよく分りませんが、多分共通する特色なのではないかと思われます。竹里の如きは、新古今集の註釋において異本のことにも觸れておりまして、異本校定とか本文批評とかの問題に觸れますことは、德川時代としては殊に新古今集の場合の如きは實に珍しいことなのであります。これも懷德堂學風の和學に於けるあらわれだと思われるのであります。

一體、大阪の和學は、契沖を開祖としまして、どういう特色をもつていたかと申しますと、概括的に申して、比較的捉われない見地に立つて、知識を廣く求め、一つの主義主張に執しない、自由討究的批判的態度が多かつた。神ながらの道とか古道とかを固執せず、漢學でも佛學でもこれを排斥するという偏狹なところがなかつたようです。むしろ、大阪の和學者は漢學の素養深く、また諸學にわたつている。卽ち、大阪の和學者は漢學に通じ、大阪の漢學者は和學に通じ、しかも兩者ともに偏狹でなかつたのがその特色であります。大阪の古典學は古典をよく解くということに重點をおくのでありまして、また、和歌和文を作る參考に古典を學ぶという傾向も見られる、また古典の原典にあたつてゆくという態度をも示している。從つて文獻的であり、實證的であるということもその特色であります。更に、もう一つ、その注釋や鑑賞のあとを調べてみますと、大阪の和學者は比較的古注を重んじ、古注から出發して古注につながりをもつている。契沖にしても、古注を多く參照しておる。懷德堂關係の加藤竹里の注釋ぶりをみても、北村

季吟の八代集抄を基礎にしておる、また蘭洲にしても季吟や契沖や榮雅抄を參照して祖述しまた批判する。萬葉集の研究には詞林采葉集にも眼を通しているという點があります。こういう點は、眞淵や宣長と非常に違つている點であります。眞淵や宣長らの新注は古注を一往全面的に否定するところから出發しているのであります。わたくしの考えでは、宣長や眞淵の新注は合理的ということを尺度にして古典を解釋しようとする傾向があり、それが學問的には敬服すべきいろいろの立派な業績をあげているわけでありますが、こういう合理的な解釋が時には古意をあやまり傳えることもあるようで、古典の本來のあり方から逸脱している場合もあるように思われるのであります。古注にもまた信ずべき點があり、案外とるべき點がある。古注にももちろん詰らないものもある。しかし、なかには古い時代の生活感情に直結している場合もあり得るのであつて、從つて、その作品の眞の生命にふれた解釋もあるのであつて、古注だからと言つて必ずしも輕視出來ない。大阪の和學者は、古注を基礎として、その上に自分の新しい見解を築いてゆく傾向があるのであります。こういう大阪和學者のいずれもが大なり小なりもつている傾向を、蘭洲や竹里ももつているわけでありますが、こういう大阪和學の源泉は、契沖であります。契沖の學問學風の上に、右に述べたような大阪和學の特色がもつともはつきりと出ているのであります。しかも、この契沖の學問學風が大阪和學のみならず、大阪の漢學の方とも、影響とは申しませんが、何らかの關係がある、懷德堂と和學との關係を考えると、すくなくとも、そういふ風に考えられはしないかと思うのであります。懷德堂に於ては蘭洲先生の和學が學問として一番すぐれていると思われます。もちろん、今日の古典解釋から見るときは、あまり參考にはならないかも知れませんが、古典研究史上に於ては、大阪和學と懷德堂との關係、またその史的位置づけということは、わたくしたちにとつては關心事なのであります。

懷德堂學風に於ける和學的雰圍氣というものは、最初の三宅萬年先生以來、傳統的につづいて來たものと見えます。寒泉先生だつたかと思いますが、最後に懷德堂を閉鎖して去られます時に殘されたお歌、あれなどは、實にすぐ

れた實感のこもつたよいお歌だと思いますが、漢學者で、ああいう歌をおよみになる氣風というものが、懷德堂には、最後まで殘つていたのであります。

もつと著書の內容にまで立入つて專門的なことを申すべきだつたかも知れませんが、あまりに專門に入りすぎて無味乾燥な話になつてもどうかと思いましたのが、却つて大ざつぱな通俗じみた話に墮し過ぎたかも知れませぬ。おゆるしを願います。實は、昭和二十九年わたくしたちの研究室から出しておりまする語文という研究雜誌に「懷德堂の和學」と題する特集號を出しました。それを御覽願いますると、懷德堂の和學についての詳細をご承知願えると思うのでありますが、ここには、その特集號に言い洩らした點やまた書き足りなかつた點を補足するということを主眼としまして、懷德堂と大阪和學との關係の一斑を申しあげた次第であります。